

水尻自子

JOSHIBI
no.202



アニメーションは動き。 私はその豊かさを 追い求めたい。

柔らかな色彩と
五感に刺さる動きによって
「感触」をまとった
短編アニメーションの数々。
これによって国内外で
高く評価されてきた
水尻自子さんは
女子美での学びを抜きに、
現在の自身は語れないと
いいます。

水尻自子（みずしり・よりこ）

アニメーション作家。女子美術大学短期大学部造形学科デザインコースおよび女子美術大学芸術学部デザイン学科卒業。身体の一部や日常的なモチーフを感触的に表現するアニメーションを制作。短編作品を発表する傍ら、ミュージックビデオや広告、展示映像等の制作を手がける。短編作品は国内外のフェスティバルで上映・受賞し評価を得ており、2025年には第75回ベルリン国際映画祭に出品した『普通の生活』が銀熊賞（審査員賞）を受賞している。

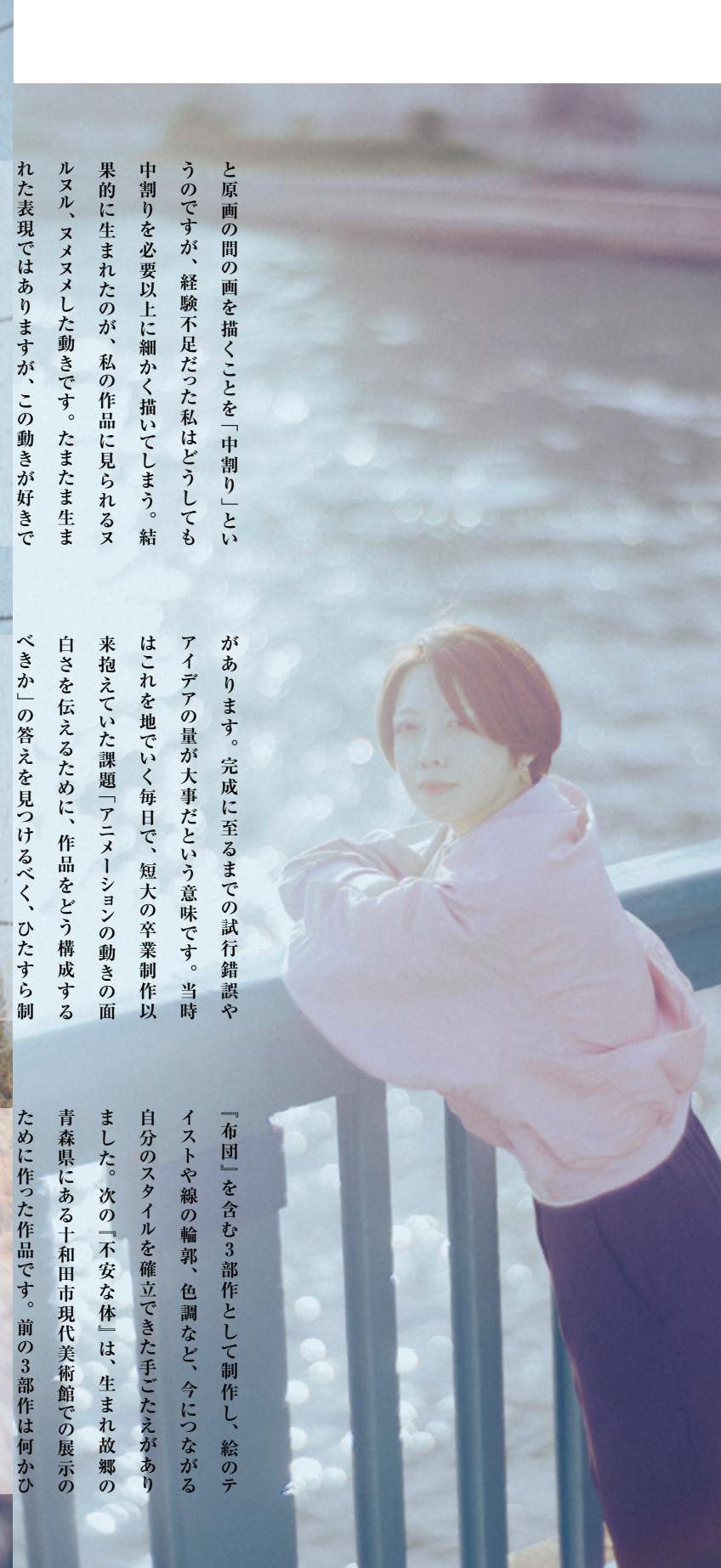
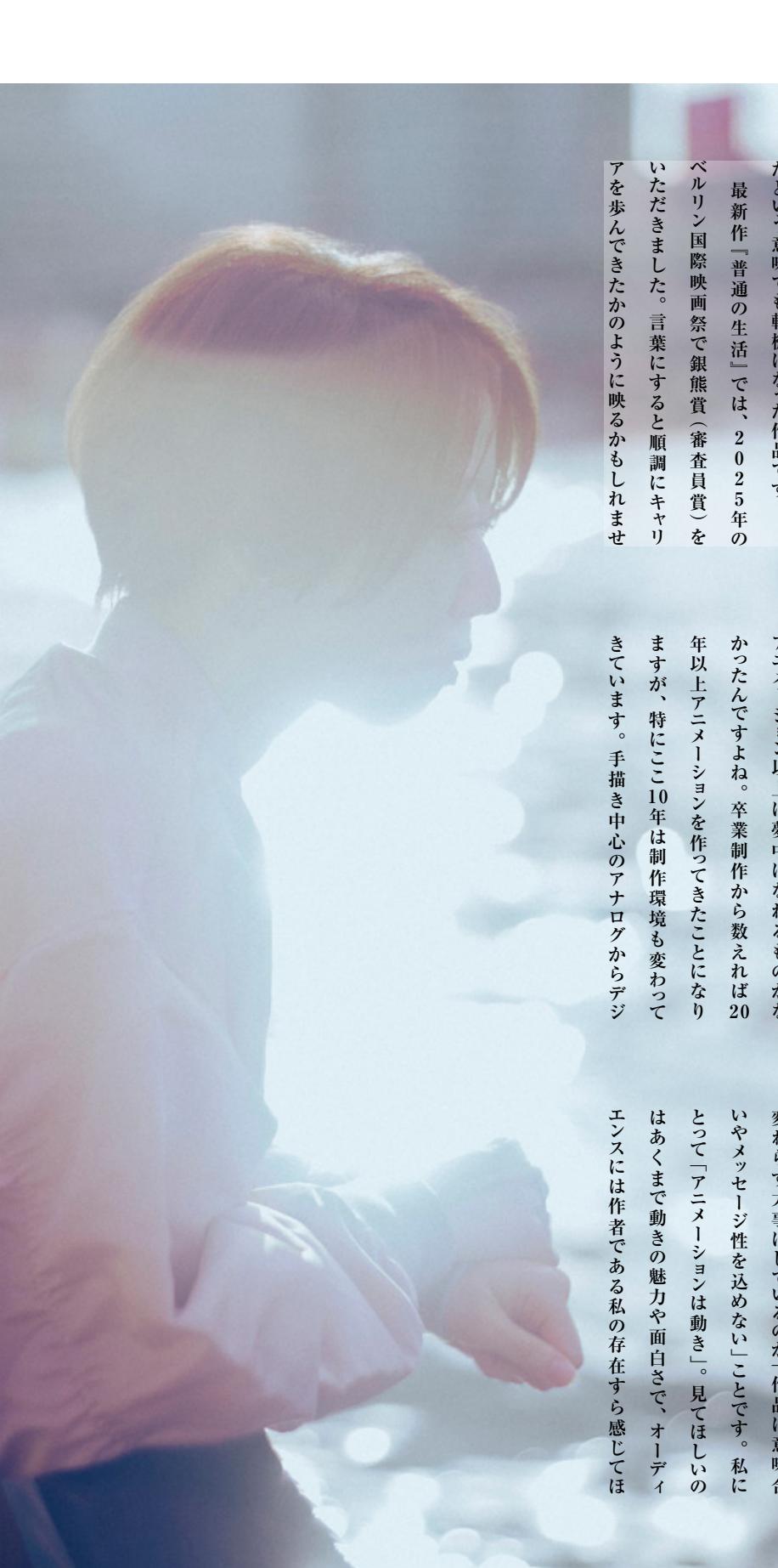
Photo 斎藤弥里 Text 株式会社フリッジ

短大2年次になつても卒業制作のテーマが決まらず悩んでいた私は、いろんな「おしりの絵」を描いていたのです。苗字に「尻」という字があることがコンプレックスで、この字と対峙することによって何かテーマを見いだせるかもしれない、と。描きためたおしりの絵を見て「面白いかも」と言つてくれたのがガビンさんでした。半ば思いつきのよう アイデアが評価されたのが嬉しくて、おしりを描くたびに見てもらうようになつていきます。ここで「毎日描いたら?」といつてくれたのも、おしりの絵がたまつたタイミングで「これをアニメーションにしたら面白いんじゃない?」と言つてくれたのもガビンさん。私から頼み込んで卒制の担当教員になつてもらつた人からのアドバイスですから、初めてのアニメーション制作にも前のめりで取り組みました。とはいっても絵が動くこと、手間がかかる方法でやつてみるばかり。大変です。それでも絵が動くことがとにかく楽しくて。こんな経緯もあって、卒業制作をアニメーション作品にしたことが私の原点になつています。「ストーリーではなく、アニメーションの動きが好きなんだ」と気づいたのもそんな最中です。アニメーションを制作する際に、原画

卒業制作の担当教員であり、編集者として当時から第1線で活躍していた伊藤ガビン先生との出会いは、私の将来を決定づけるものになりました。

私は短大に入学したのですが、ここでは絵画からデザインまでをカバーする幅広い科目群からいろんな学びに触れられ、自らの適性を見極めていました。このカリキュラムは何も知らずに入学した私にはうつづけだったと思います。短大だけでなく大学にも共通する話ですが女性ばかりの環境ですから、周囲の目を気にせずのびのびと過ごせたのも良かった。この大らかな校風は私には合つていましたね。

今でこそ、アニメーション作家として国内外で認知されるようになりましたが、女子美に入った時点では、映像やアニメーションの制作経験もなければ、アニメーション作家になるなんて夢にも思いませんでした。そもそも美大を志したのは高3の夏。遅過ぎです（笑）。「どうせ学ぶなら好きなことを」と決断したのはいいものの、高校で所属していた美術部でも絵が上手いほうではなかつた私は、確たる目的意識はありませんでした。女子美に入ることがなければ、アニメーション作家になることは絶対になかったと断言できます。



と原画の間の画を描くことを「中割り」とい
うのですが、経験不足だった私はどうしても
中割りを必要以上に細かく描いてしまう。結
果的に生まれたのが、私の作品に見られるヌ
ルヌル、ヌメヌメした動きです。たまたま生ま
れた表現ではありますが、この動きが好きで
「アニメーション制作を続けたい」とますます
思うようになりました。

その後、女子美の3年次に編入し、卒業後
は助手として働かせてもらうなど、20代後
半まで女子美に通いながら自主制作に励み
ます。女子美で学んで印象に残っていること
の一つに「作品の面白さは作業量に比例する」

があります。完成に至るまでの試行錯誤や
アイデアの量が大事だという意味です。当時
はこれを地でいく毎日で、短大の卒業制作以
来抱えていた課題「アニメーションの動きの面
白さを伝えるために、作品をどう構成する
べきか」の答えを見つけるべく、ひたすら制
作に打ち込みました。転機となつたのは28歳
の時に手掛けた『布団』という作品です。こ
の作品でも「意味は分からぬけど面白いこ
とは分かる」構成を目指しました。結果的
に文化庁メディア芸術祭の新人賞をいただく
に至ります。

その後、「かまくら」と「幕」という作品を

「布団」を含む3部作として制作し、絵のテ
イストや線の輪郭、色調など、今につながる
自分のスタイルを確立できた手ごたえがあり
ました。次の『不安な体』は、生まれ故郷の
青森県にある十和田市現代美術館での展示の
ために作った作品です。前の3部作は何かひ
とつ動きがあつて、それを感覚的な連鎖でつ
なげて構成していくのですが、それによつて
物語や意味があるような雰囲気が漂つてしま
い、観る人がそれにとらわれかねないことが
気がかりでした。一方、『不安な体』では物語
性を排除し、徹底的に動きにフォーカスした
のです。結果、これまでとは異なるスタイルの

んが、先のことはあまり考えず必死でやつて
きたというのが正直なところです。短大の卒
業制作以来、一つの作品を作るたびに全力を
出し切るのが私の制作スタイルで、体力的に
辛いと感じることもありました。けれども、
アニメーション以上に夢中になれるものがな
かつたんですね。卒業制作から数えれば20
年以上アニメーションを作ってきたことになり
ますが、特にここ10年は制作環境も変わって
きています。手書き中心のアナログからデジ

タルでの作業へと移行し、『不安な体』からは
制作会社が入り、作品の質はもちろん、スケ
ジュールやお金の管理まで問われる立場にな
りました。

自分を取り巻く状況が変わっていく中でも
変わらず大事にしているのが「作品に意味合
いやメッセージ性を込めない」ことです。私に
とつて「アニメーションは動き」。見てほしいの
はあくまで動きの魅力や面白さで、オーディ
エンスには作者である私の存在すら感じてほ

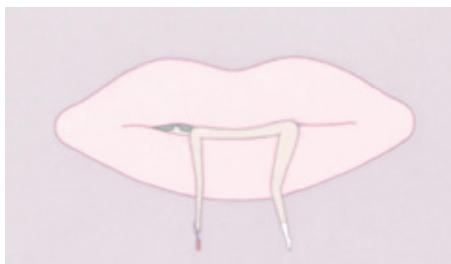
作品を形にでき、アニメーション作家でも芸術
家でもあるという自分の立ち位置を打ち出せ
た自負があります。また、同作はカンヌ国際
映画祭監督週間のコンペティション作品にもな
り、国際的な舞台で評価を受けるようになつ
たという意味でも転機になった作品です。

最新作『普通の生活』では、2025年の
ベルリン国際映画祭で銀熊賞（審査員賞）を
いただきました。言葉にすると順調にキャリ
アを歩んできたかのように映るかもしれません

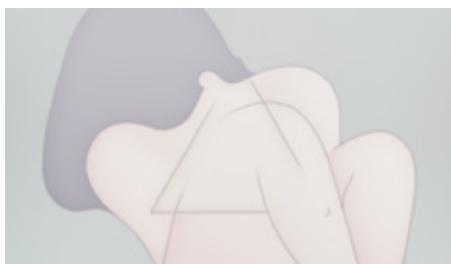
しくない。作品で取り上げる動きもあくまで日常的で、みんながわかるものです。例えば『不安な体』の中には、指先のささくれが気になるシーンがあります。普段の生活においては取るに足らない動作ですが、アニメーションにすることによって違った印象になる。私はこれを「無意味から生まれる豊かさ」と呼んでいます。おしりの絵からスタートした短大の卒業制作以来、貫して追求してきたのがこれ。今後どんな作品を作ることになつても変わらず追求し続けるものこれだと思っています。

2025年度からは女子美で非常勤講師をするようになりました。卒業制作を通して、とことん打ち込める作を見つけられた自分を幸運だったと思いますし、学生のみなさんにも、ぜひそうしたものを見つけてほしい。そのためにも、大学や私を含む教員たちをうまく利用してもらいたいですね。熱中できるものを見つければ大学生活は、ある意味で

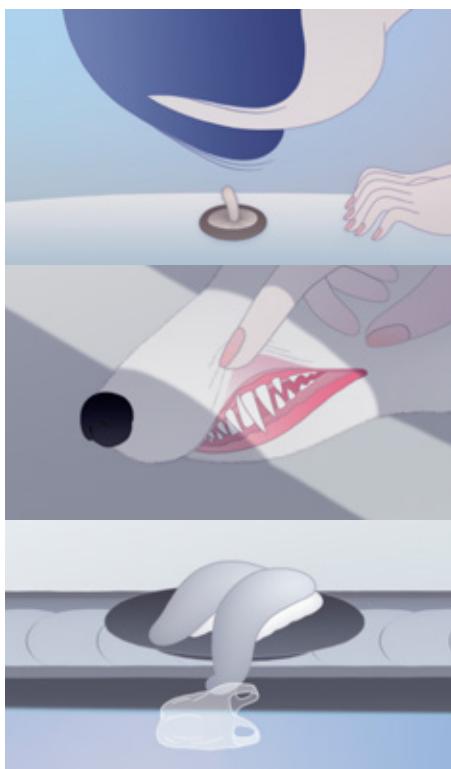
「勝ち」です。絵の上手い、下手なんかは関係ありません。私自身も不器用で特別な才能はありませんでした。むしろ才能に乏しいからこそ自分のスタイルを模索することになり、ここまで作り続けることができたのかな、と。今はそんな風に感じています。



「布団」(2012)



「不安な体」(2021)
©MIYU Productions, New Deer, Mizushiri Yoriko



「普通の生活」(2025)
第75回ベルリン国際映画祭
短編コンペティション部門 銀熊賞(審査員賞)
©Miyu Productions, New Deer



制作する上で大切にしていることを教えてください。

Q 5

自分にとって重要なテーマや土台となる考え方などから、ぶれないようにすること。これはとても大切なことだと思います。しかし同時に、過去の「自己模倣」にならないようにすることも大切だと考えています。つまり制作の方向性を、自分で型に押し込めてしまうことに注意しなければいけないと思います。芸術活動は、制作する作品が変容してゆくことが重要だと思っています。歳を重ねるとともに、そのように感じることが増えてきました。

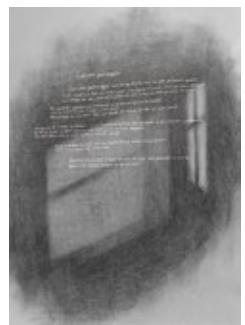


L'ultimo Paesaggio 最期の景色 -Epiologo エピローグ- / 2025 / 300×120×3cm / ミクストメディアに鉛筆

海外で活動することの楽しさとは?

Q 6

異なる言語の中で制作することはとても刺激的です。たとえば「忘却」はイタリア語で「Oblio」といいますが、そのニュアンスは微妙に異なります。翻訳できない概念や言葉の間に広がる世界を感じることができます。二つの言語空間を行き来しながら、一つの概念の意味が広がっていく感覚は、創作活動においてとても豊かな体験だと思います。



Appunti - L'ultimo paesaggio #01- / 2024 / 42×29.7cm / 紙に鉛筆

大学時代にやっておくべきことについてアドバイスをお願いします。

Q 7

女子美は先生も施設も素晴らしい、本当に恵まれた環境です。ぜひ最大限に活用してください。先生との対話をたくさん持つこと、そして所属学科を超えて他分野の先生にも話を聞いてみることをおすすめします。私は異なる学科の先生にもよく相談していました。図書館や美術館も素晴らしいですし、他学科の制作現場を見学するのも良い刺激になりますよ。



Nella nebbia #01 (部分) / 2024 / 42×30×3cm / ミクストメディアに鉛筆、墨

やりたいこと、夢を実現するためのヒントを教えてください。

Q 8

自分のやりたいことができるだけ具体的に思い描くことが大切です。そして情報を集め、学び続ける姿勢が大切だと思います。気になる人や先輩がいたら、ぜひ話を聞いてみてください。そうした対話や勉強の積み重ねが、自分の道を見つける手がかりになります。

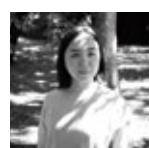


グループ展「KOMOREBI 木漏れ日」/ 2022 / サレッソ、イタリア

女子美生にメッセージをお願いします。

Q 9

大学生活が実りあるものになりますように。良い出会いと対話の時間がありますように。それらは卒業後も人生の中で大切な糧となり、時を経てより深まっていくものです。心から応援しています!



高橋香菜子 (たかはし・かなこ)

美術家。
2006年、女子美術大学芸術学部デザイン学科環境デザインコース卒業。フランス・パリに研究のため1年間滞在したのち、女子美術大学ミラノ賞を受賞。現在はイタリアを拠点に、各地でグループ展・個展を開催している。近年は、個人の内的経験を通して、「記憶」と「忘却」、「存在」と「不在」のあわいに潜むミナマルな空間を探求している。「窓」という象徴的なモチーフを媒介に、個人の記憶が普遍へと開かれていくプロセスを作品として提示している。2023年秋の「Premio Paolo VI per l'arte contemporanea」ファイナリスト展では、記憶と忘却のあわいをテーマに、平面作品と長い巻物、自身の声による音響作品からなるサイトスペシフィックな展示を発表。
Website: kanacotakahashi.com Instagram: kanacotakahashi

高橋 香菜子

MILANO

海外で活動するようになったきっかけは?

大学卒業後、オフィス家具メーカーで空間デザイナーとして働きながら、個人の作品制作を続けていました。大きな企業に所属して社会の多面性を実感する一方、日本という島国で、一つの言語に囲まれた社会では体感できない価値観や世界観を探求したいと強く思うようになりました。漠然とした将来への不安も、その決断を後押ししたのかもしれません。はじめは単身でパリへ、その後女子美のミラノ賞をいただき、今はミラノを拠点にしています。



21Riflessioni (部分) / 2025 / 544×35cm / 和紙に鉛筆

女子美に進学した理由は?

女性だけの、のびのびとした校風が良いなと思いました。高校生の頃は、同時に他の美大にも魅力を感じていましたが、母が「香菜子には女子美が合っていると思うよ!」と言っていたことが印象的です。今になって思えば本当にその通りだと思います。当時私には見えていなかったいろいろなことが、母にはきっと見えていたのですね。



個展「Pasaaggi in Penombra -かげりに浮かぶ調べ-」/ 2023 / アレッサン卓ア、イタリア

女子美時代はどんな学生でしたか?

女子美時代は環境デザインコース(現:環境デザイン専攻)に所属していましたが、課題一つひとつに丁寧に取り組み、先生方にもよく相談に行っていました。暇があれば図書館に通い、美術書や映画をよく観ていました。当時はネット配信がなかったので、授業の合間に図書館で映画を観るのが楽しみでした。女子美の図書館は収蔵書も映画コレクションも素晴らしいです。また、外部の学生コンペなどにも積極的に挑戦していた学生だったと思います。

女子美時代の、特に印象深い思い出は?

大学4年のゼミ研究旅行が印象に残っています。赤沼國勝教授(当時)のもと、長野県の宿場町・奈良井宿で過ごしました。江戸時代の面影を残す町で、歴史や伝統に触れながらものづくりを見つめ直す貴重な体験でした。教授は「卒業制作はその後の制作の礎になる」と語っており、その理念に基づくこの経験が、私のその後の創作にも大きな影響を与えたと思います。

創立125周年記念式典が青山「スパイナルホール」で行われました



作品が次々と登場。さらに、黎明期の女子美の校舎や授業の様子が3Dビジュアルで再現されたほか、横井玉子や佐藤志津の肖像写真が動き、語る、粹な演出も。125年前から現在に至るまでの女子美の軌跡を、印象的な映像で体感することができました。

そして、明治の菊坂校舎時代から現在まで、五世代7名で女子美スピリットをつなぐご家族へ小倉学長から表彰が行われ、式典は中盤へ。ハローキティの3代目デザイナーとしても知られる、株式会社サンリオの山口裕子氏が会長を務める女子美術大学同窓会と、現役女子美生が合同で開発した女子美マスクコットキャラクター「女子美ちゃん」のお披露目です。女子美の校章のモチーフである八咫鏡を取り入れた女子美ちゃん。本学卒業生で客員教授のイルカ先生が作詞・作曲・歌を手掛けたテーマソングにあわせて、女子美ちゃんが踊る舞台に、



10月30日。遡ること125年前、女子美が誕生したまさにその日、「女子美術大学 創立125周年記念式典」が青山のスパイナルホールで行われました。

式典には、関係大学や企業、美術関係者、本学教職員など約250人が来場。会場前には開校初期の女子美の姿を伝える貴重な資料などの展示もあり、長い歴史の節目となる記念の日を体感し、ともに祝う場となりました。

厳かな雰囲気のなか、司会者による開式の辞に続いて、福下雄二理事長、小川秀興氏（学校法人順天堂理事長）、大村智名誉理事長、小倉文子学長の4名が登壇。福下理事長から式辞が述べられ、創立者・横井玉子と幕末の

政治思想家・横井小楠との関係性や、それまでの良妻賢母主義に留まらない、高度な女子高等教育の先駆けとしての女子美の歩みが語されました。

続く来賓祝辞は、順天堂の小川秀興氏。創立者・横井玉子の遺志を継ぎ、女子美の第二代校長として学校経営に尽力した佐藤志津は、順天堂二代堂主・佐藤尚中の長女として佐藤家を支え、同家に養子として迎えられた佐藤進氏（後の第三代堂主）の夫人となりました。女子美と順天堂との間を結ぶ深い歴史的なつながりを、順天堂の理事長である小川氏が自ら語りました。

その後の映像上映「女子美の歴史と今」では、歴代女子美生の

会場の空気が一気に和みました。その後は海外在住卒業生12名からのビデオメッセージ集に続き、スパイナルガーデンでの記念展覧会「女子美術大学創立125周年記念展」この世界に生きること」と、日本橋三越本店での「女子美術大学創立125周年記念展——教育されてきた才能たち——（明治から令和へ）」が、芸術学部長の清水美三子先生から紹介されました。続く祝辞では、本学付属高等学校卒業生で客員教授の桃井かおり先生が登壇。女子美時代の思い出を語りながら、等身大で美術に挑む女子美生へエールが送られました。

式典のラストを飾ったのは、小倉文子学長。女子美の建学の精神とともに、他者を認め、他者と比べず、柔軟でしなやかに創作に励む女子美生の今の精神性を語り、やかな式典は、幕を閉じました。



撮影:末永真礼生

女子美術大学創立125周年記念展
「女子美とフランス — もうひとつの日仏交流史」
会期:2025年5月29日(木)～8月5日(火)【60日】
会場:女子美アートミュージアム

関連イベント

講演会

5月31日(土)
「女子美とフランス—日仏交流のアナザーストーリー」
講師:三谷理華(美術館館長・本学教授・本展企画者)
6月21日(土)
「女子美をつくった横井玉子と佐藤志津
—浅井忠から見えてくる風景」
講師:貝塚健氏(千葉県立美術館館長)

ギャラリートーク

7月5日(土)
エデュケーターによるギャラリートーク
7月21日(月・祝)
館長(本展企画者)によるギャラリートーク

スペシャルイベント

7月21日(月・祝)スペシャルライブ
「元宝塚歌劇団月組トップスター 古城都 パリを謳う」
出演:古城都
ピアノ:サイモン・コスグローブ(本学准教授)



ワークショップ

8月2日(土) 本学学生によるワークショップ
「ウチはフランスに旅をする」



創立125周年記念展として、女子美アートミュージアムでは、「女子美とフランス—もうひとつの日仏交流史」

とフランス—もうひとつの日仏交流史

を開催しました。

業生たちの姿も見出せます。女子美の

歴史を綺羅星のごとく彩るフランスに学

んだ卒業生や、「女子美パリ賞」受賞者、

28作家64点の作品は、女性美術家の存

在を通じた日仏文化交流史という新た

な歴史の地平をも開き、本展を創立記

念展にふさわしいものとしました。

また本展は、関連イベントも充実した

ものとなりました。2回にわたる講演

会では、それぞれ、展覧会の魅力や本学

の歴史をより深く知るための講話があ

りました。ギャラリートークも2回開催

され、展覧会鑑賞のポイントが、実際の

作品を前に語られました。こども向け

のワークショップでは、展覧会にちなん

だうちわを制作することで、展覧会を

より楽しく鑑賞するきっかけが示されま

した。そして最も盛り上がりを見せたの

は、宝塚歌劇団元月組トップスターの古

城都さんのライヴでした。古城さんが熱

く歌うフランスにちなんだ歌の数々は、

来場の皆さんを魅了し、展覧会の世界

観をより強く印象づけていました。

戦前から現代に至るまで、志を胸に

異国へと旅立った女子美生やその作品

を紹介した本展。来場者からは、「衝撃

を受けた」「勇気をもった」などの、

いつもとは少し違ったお言葉も多くいた

だきました。海外で活躍した、あるいは

活躍している卒業生たちが、本学のこ

れからの未来を導き照らしてくれてい

るかのようでした。

創立125周年記念展

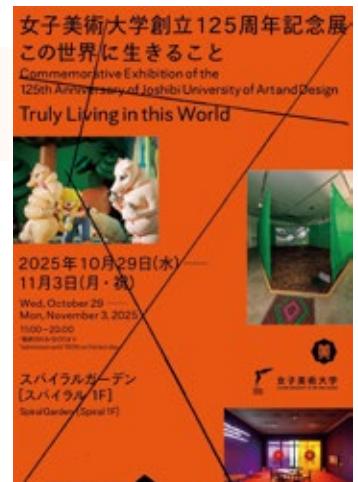
創立125周年を迎えたことを記念し、学内外で展覧会を開催いたしました。



女子美術大学創立125周年記念展
女子美とフランス—もうひとつの日仏交流史

女子美アートミュージアム(神奈川県相模原市)
2025年5月29日(木)～8月5日(火)

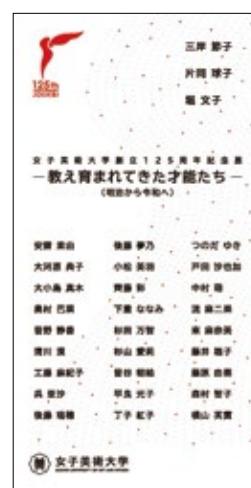
P13



女子美術大学創立125周年記念展
この世界に生きること

スパイラルガーデン(東京都港区)
2025年10月29日(水)～11月3日(月祝)

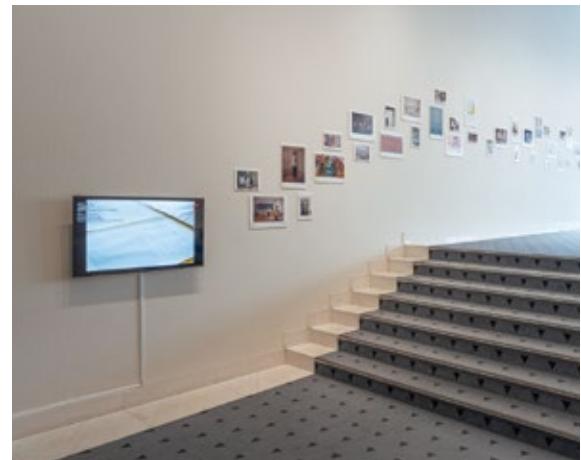
P14 P15



女子美術大学創立125周年記念展
—教え育まれてきた才能たち—(明治から令和へ)

日本橋三越本店(東京都中央区)
2025年12月3日(水)～12月8日(月)

次号(No.203)にてご紹介させていただきます



「この世界に生きること」Part 2 展示風景 写真:宮澤 嘉(株式会社コグワークス)

Part 2

本学の芸術学部各専攻・表現領域、
短期大学部各コースの推薦による卒業生 38組 39名

青木 明子 (AKIKO AOKI デザイナー)、あかほり このみ (立体作家、ゲームモーションデザイナー)、安次嶺 維理亜 (デザイナー)、飯嶋 桃代 (現代アーティスト)、飯田 玄汀 (書家)、市川 海里 (株式会社セガフェイブ MD・TOY 開発生産本部 TOY 開発部)、大小島 真木 (現代美術家・アートユニット)、大島 智子 (イラストレーター)、小野寺 づる (お役者、ド腐れ漫画家、脚本・演出家)、春日 佳歩 (油彩画家)、久野 美怜 (フォトグラファー、フィルムメーカー ディレクター)、河野 香奈恵 (テキスタイル表現、染織作家)、柴谷 麻以 (アートディレクター)、杉田 万智 (現代アーティスト)、鈴木 みのり (CMFデザイナー)、せきぐち ひろみ (絵本作家、イラストレーター)、瀬古 泰加 (デザイナー、ギャラリーオーナー)、高原 真央 (建築家、アトリエモタカ主宰)、田中 もなみ (中学校主任教諭)、太郎物語 杏優、果音 (演劇ユニット)、千田 マミ (タグチアートコレクション ディレクター)、土屋 紘奈 (建築家)、中村 美穂 (木版画家)、中村 萌 (美術家)、野村 仁美 (Nomat ディレクター)、はらわた ちゅん子 (ネオン画アーティスト)、藤沢 まゆ (染色画家)、藤野 麻由羅 (日本画家)、藤原 宇希子 (日本画家)、HONGAMA (イラストレーター)、三留 舞 (ガラス工芸作家)、宮本 華子 (現代作家、AIR motomoto 運用者)、森村 智子 (現代アーティスト)、山羊 藏 (アート作家)、山形 遥 (ブランディングデザイナー、アートディレクター)、山崎 菜穂子 (染色・図案家)、結城 香 (ぬいぐるみ商品企画・デザイナー)、余 詩穎 (アクションフィギュア原型師)

Part 1 では、3組4名の作家が各々の視点から鑑賞者に問いかける作品を展示しました。飯山由貴は、茜染めを施した布の囲いによるインスタレーション《なざし なり なづけ》と《年表をうつす》を出品し、戦争・軍事と性暴力の歴史に鑑賞者が出会う場を作り出しました。サエボーグは、自作のボディースーツ「サエドッグ」をパフォーマーと共に着用して連日パフォーマンスを行い、鑑賞者との対話の場を生み出しました。「繁殖する庭プロジェクト(小宮りさ麻吏奈+鈴木千尋)」は、映画『繁殖する庭』をもとにしたインスタレーションを通じて、異性愛規範や家族のあり方について問いかけました。Part 2 では、卒業生38組39名の活動をインタビュー映像と写真パネルで構成し、多種多様な活動の広がりを紹介しました。本展はSNSを中心に注目を集め、来場者数は3750名に達し、創立125周年を記念する内容として高い評価を得ました。

会期
2025年10月29日(水)～11月3日(月祝)
会場
スパイラルガーデン

女子美術大学創立125周年記念展 この世界に生きること



繁殖する庭プロジェクト《繁殖する庭》映像インスタレーション展示風景
写真:宮澤 嘉(株式会社コグワークス)



飯山由貴《なざし なり なづけ》、《年表をうつす》(写真上の左上部) 展示風景
写真:宮澤 嘉(株式会社コグワークス)



サエボーグ《I WAS MADE FOR LOVING YOU》パフォーマンス風景
写真:宮澤 嘉(株式会社コグワークス)

女子美ラボの活動

本企画を推進する「女子美クリエイティブ・ラボラトリー（女子美ラボ）」は、本学の創造性を社会と繋ぎ、多様な人々が学び合う場をつくる「創造のハブ」です。120年以上にわたる女子美生の強固なネットワークを生かしながら、「アート・デザイン」「ジェンダー」「教育」をテーマに、研究活動、イベント、展覧会、オンラインコンテンツを展開しています。私たちはこうした活動を通じて、「女性のための美術大学は今何をすべきか」、そして「芸術による女性の自立に寄与するためにどのような役割が求められるのか」という問いを、皆さんと一緒に考え続けていきます。



海外交流会開催の目的

本交流会は女子美術大学創立125周年記念事業の一環として開催され、海外で活躍する卒業生24名、ミラノ夏期研修に参加した在学生15名、そして本学の教職員17名が参加しました。在学生が卒業生から直接学ぶ機会をつくり、将来の国際的なキャリアをより具体的に思い描けるようになることを目指し本交流会を開催しました。また、「芸術による女性の自立」という本学の建学の精神を自ら体現し、海外でたくましく活躍する卒業生の姿は、在学生だけでなく教職員にとっても大きな励ましとなりました。今回のイベントを通じて、世代や分野を越えて卒業生と在学生が新たにつながり、そのネットワークを広げ、深めることができました。こうしたつながりが、これから女子美におけるグローバルな教育やキャリア支援を支える大切な土台となります。



卒業生へのインタビュー



交流会の開催に合わせ、現地ミラノで長年にわたり功績を築いてこられた卒業生へのインタビューを実施しました。湯崎夫沙子氏、野尻奈津子氏、井口純子氏に、その貴重な経験やキャリアについてお話を伺いました。後進の指針となるロールモデルの軌跡を記録し、大学の資産としてアーカイブ化することも、本企画の重要な目的の一つです。



イタリア、ミラノとの関係

女子美術大学は、芸術とデザインの世界的な中心地であるイタリア・ミラノと深い関係を築いています。今回の交流会に、本学客員教授のマーラ・セルベット先生、さらにブレラ国立美術学院教授で本学招聘教授の清水哲郎先生が来賓として参加されたことは、本学と現地の教育・芸術機関との結びつきの強さを再確認する場となりました。また、ミラノにはアニメーション作家の湯崎夫沙子氏をはじめ、長年にわたり第一線で功績を築いてこられた卒業生が多数在住しています。芸術の都ミラノは、本学のグローバルなネットワークの重要なハブであり、在学生が世界に触れ、未来のキャリアを考える上で欠かせない場所となっています。

女子美グローバルコネクトの構想

今回のミラノでの交流会は、女子美術大学が未来を見据え大切にしてきたグローバルなつながりを、さらに広げていくための大きな一歩です。本学では、このイベントを「今後の国際的な教育・キャリア支援を育していくための礎を築く」機会として捉えています。その中心にあるのは、世代や分野、国境を越えて人と人がつながることです。そして、そのつながりを「外に開かれた交流の場（プラットフォーム）」として発展させていきたいと考えています。海外で活躍する卒業生というロールモデルと在学生が直接出会うことで、国際的なキャリア形成を支える新しい可能性が広がります。この交流会をきっかけに、世界に広がる女子美のネットワークをより充実させ、学生一人ひとりの未来の選択肢を広げるグローバルな学びの環境を築いていくことを目指します。



参加した在学生からの感想

参加した在学生からは、海外で活躍する卒業生と一对一で話ができる貴重な経験に対し、熱意ある感想が寄せられました。特に、日本を離れて活動するに至った理由や経緯など、「調べてもなかなか出てこない、非常に参考になるお話」を聞いたことへの喜びの声が多く挙がっています。先輩方のリアルな生き方に触れたことで、「自分の視野も広がった」と今後のモチベーション向上に繋がっただけでなく、「多種多様なルートがあって、もしかしたら自分でもできるかもと考えました。」と、自身の将来に新たな希望や可能性を見出すきっかけとなったようです。



女子美マスコットキャラクター 女子美ちゃん

現役女子美生と女子美同窓生を繋げるものとして創立125周年を機にマスコットキャラクター「女子美ちゃん」のビジュアルを2023年夏休みに付属中学生・大学院生を対象に募集しました。



199の応募作品の中から同窓会で5作品に絞り、女子美祭2024来場者6500人に投票いただきました。そして、八咫鏡の美の文字

から生まれた東地聖生さん(当時付属高等学校3年生)の女子美ちゃんがグランプリに選ばされました。その後、本学同窓生でシンガーソングライターのイルカさんに楽曲を依頼し、CDを発売することになりました。CDのジャケットデザインは、本学短期大学部の学生に依頼しました。CDのジャケットデザインは、ほか、楽曲にあわせた女子美ちゃんのダンスの振り付けを同窓生の安居

りカさんに依頼しました。暑い夏にダンスレッスンがスタートし、女子美祭2025デビューに向けて女子美ちゃんは頑張りました。

また、女子美ちゃんグッズも同窓生のグッズプランナー協力のもと、女子美祭2025の3日間での販売にむけて制作し、ぬいぐるみマスコット500個が2日目で完売するとい

う想定外の嬉しいことが起き、女子

リカさんに依頼しました。暑い夏にダンスレッスンがスタートし、女子美祭2025デビューに向けて女子美ちゃんは頑張りました。

また、女子美ちゃんグッズも同窓生のグッズプランナー協力のもと、女子美祭2025の3日間での販売にむけて制作し、ぬいぐるみマスコット500個が2日目で完売するとい

う想定外の嬉しいことが起き、女子



アートディレクターの吉田ユニ先生(本学客員教授)が、女子美のビジュアルを制作

付属中学から10年間を女子美で過ごした、本学客員教授アートディレクターの吉田ユニ先生。独自の世界観で多くの人を魅了し続けていた吉田先生が、女子美125周年を機に、学生たち、そしてこれから女子美で学ぶ皆さんへのあたたか

なメッセージを込めたビジュアルをつくりてくださいました。

「電球はひらめきやアイデアのモチーフ。シャボン玉を電球に見立てて、シャボン玉が無限に広がっていく様子を、アイデアがどんどんひろがっていくイメージに重ねました。『素敵

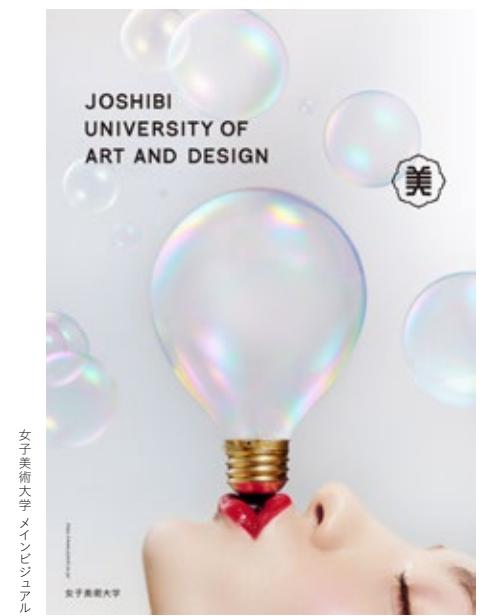
なアイデアとひらめきを、世の中に送り出してほしい』。そんな思いを込めたビジュアルです。」(吉田先生)

今回制作されたビジュアルは、「大学案内2026」の表紙をはじめ、公式ウェブサイトなど、女子美を象徴するイメージとして多様な媒体

で使用されています。

また、吉田ユニ先生がメインビジュアルを手がけたテレビ朝日系7月

期木曜ドラマ『しあわせな結婚』では、本学相模原キャンパスの顔料創造ファクトリーがロケ地として使用され、最終回で放送されました。



テレビ朝日系7月期木曜ドラマ『しあわせな結婚』メインビジュアル

女子美祭 2025

びじゅつの冒険 in 女子美祭 2025

相模原キャンパスでは、小中学生を対象としたモノ作りが体験できるワークショップ『びじゅつの冒険』を実施しました。女子美祭期間中、相模原キャンパスの女子美アートミュージアム (JAM) では、造形「さがみ風っ子展」が開催されています。さがみ風っ子展は、令和7年度で45回目を迎える、小中学校の児童生徒の図工・美術作品約18,000点が市内4カ所の会場に展示される大規模な展示です。本学も2003年から会場の一つとなっており、昨年より地域の子どもたちと大学との交流を増やすことで大学として地域に貢献したいという主旨のもと、各専攻主催のワークショップを企画しました。本学の建学の精神「専門の技術家・美術教師の養成」をふまえ、学生にアートを介したコミュニケーション力を育むことも目的として、当日は学生がスタッフとして指導にあたり、たくさんの来場者に楽しんでいただくことができました。



ポスター「ものがたり」
杉並キャンパス:芸術学部 アート・デザイン表現学科 ヒーリング表現領域 3年 中辻萌黄さん
相模原キャンパス:芸術学部 美術学科 日本書写 1年 山岡里紗さん

10月24日～26日の3日間、杉並・相模原両キャンパスにて『女子美祭2025』が開催されました。今年度の女子美祭は、杉並キャンパス、相模原キャンパスともに、「ものがたり」をテーマにさまざまなイベントが実施されました。在学生の作品展示、自主展示、ステージ発表、有志によるハンドメイド等のグッズ販売も好評でした。また、卒業生が手掛けたキャラクターが多く描かれていたサンリオカフェワゴンによる軽食販売を実施。杉並キャンパスには、サンリオの人気キャラクター「マイメロディ」「クロミ」が遊びにきてくれました。また、ゲスト講演会として杉並キャンパスには声優の広瀬裕也さんが来校。相模原キャンパスでは、ジエラードンさん、素敵じゃないかさんによるお笑いライブ、声優の土岐隼一さんによるトークショーが開催され、好評を博しました。学生のみならず、多くの来場者が訪れ、キャンパスが賑わいをみせました。

共創デザイン学科の多様な学びの1つに「産官学連携による実学」があります。4年間の産官学連携プロジェクトでは、実際の社会や企業が抱える課題に対して自ら企画し提案を行うことのできる実践的な力を身につけていきます。ここでは今年度行ったプロジェクトの一部をご紹介いたします。

新潟県妙高市 × 共創デザイン学科

2027年に新潟県妙高市とスイスのツェルマット、グリンデルワルトとの姉妹都市締結30周年を記念して行われるイベントで使用される「法被（はっぴ）」のデザインを、共創デザイン学科の学生が担当しました。デザインコンセプトは「姉妹都市」「友好」「Respect」。それぞれの姉妹都市をテーマに学生がデザインを提案し、8月8日にはオンラインで妙高市に向けてプレゼンテーションを実施しました。その結果、複数の応募作品の中から3組のデザイン4種が採用されました。

9月3日には杉並キャンパスにて授賞式が行われ、妙高市の城戸陽二市長が来校。市長からは妙高市の記念品が学生に贈られ、学生からは今回の取り組みを通しての学びや今後の抱負が語られました。自身のデザインが実際に地域イベントで使用される貴重な機会に、学生たちは大きな期待と責任を胸に、さらなるブラッシュアップに取り組んでいます。完成した法被は、2027年に開催される姉妹都市締結30周年記念イベントにて披露される予定です。



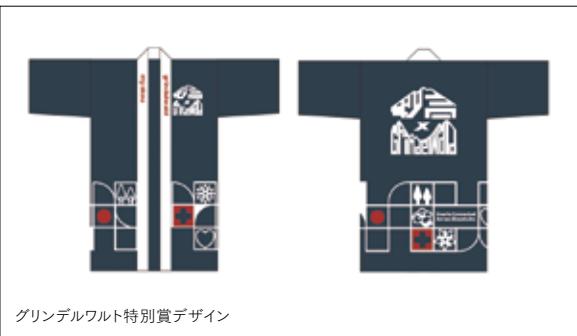
ツェルマット受賞者デザイン



ツェルマット特別賞デザイン



グリンデルワルト受賞者デザイン



グリンデルワルト特別賞デザイン



小林製薬 × 共創デザイン学科

共創デザイン学科の学生が、小林製薬株式会社の人気ブランド「サラサーティ SARA・LI・E（さらりえ）」のデザインを行いました。本プロジェクトは、共創デザイン学科の産学連携による実践的なデザイン教育の一環として行われ、学生28名が参加。約5ヵ月にわたって市場リサーチからペルソナ設定、課題発見、企画提案まで、デザイン開発を担当し、「SARA・LI・E（さらりえ）」のブランドイメージや世界観を大切にしつつ、わかりやすく抵抗感のない、日常に自然に馴染むデザインを提案しました。シンプルでありながらおしゃれで柔らかな印象が特徴で、現代を生きる女性の多様なライフスタイルに寄り添えるように想いが込められた特別なデザイン製品は、6月末より数量限定で発売されました。



真多呂人形 × 共創デザイン学科



7月5日・6日に東京ビッグサイトで開催された「デザインフェスタvol.61」にて、共創デザイン学科の学生が、木目込み人形の老舗・株式会社真多呂人形との産学連携プロジェクトの取り組みとしてコラボブースを出展しました。本プロジェクトは、真多呂人形が受け継いできた、人形文化を象徴する伝統技法である、木目込みの魅力を、より多くの方々に伝えることを目的に進められてきました。会場では、木目込みの技法を活かして制作したお面やかんざしを販売し、多くの来場者の注目を集めました。今回の出展は学生たちにとって、自身の作品を社会に発信する貴重な機会となりました。

モリトアパレル × 共創デザイン学科

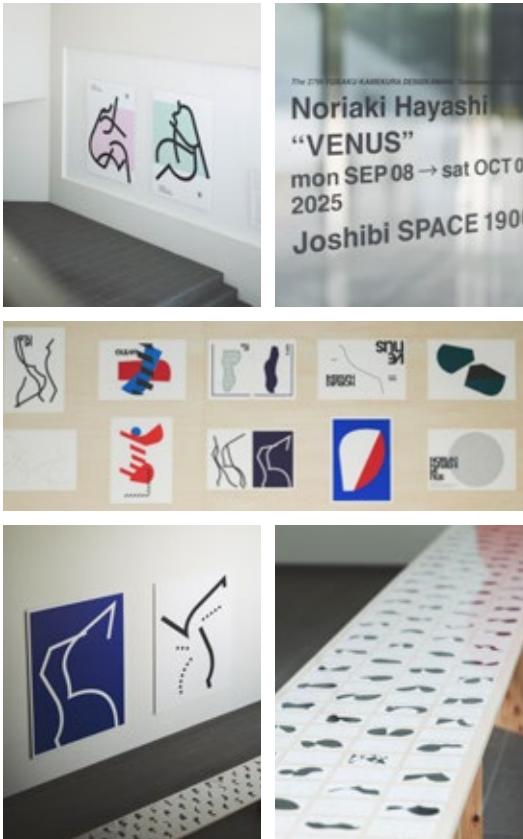
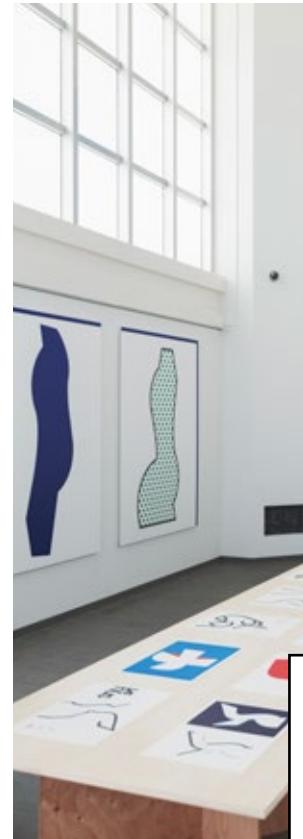
服飾付属品専門商社のモリトアパレル株式会社との産学連携プロジェクトで、共創デザイン学科の学生3名がTシャツをデザインしました。このTシャツは、日本国内で回収された廃漁網を再生ナイロン繊維にして、10%配合されたもので、漁師の処理負担や廃棄物削減に貢献した製品です。本取り組みをいかにして生活者に関心、認知向上できるかを4ヶ月かけて議論し、「海の豊かさ」を主なテーマとして「網と鱗」「海の哺乳類」「波」「タコと泡」の4種をアーティスティックに表現しました。Tシャツは新百合ヶ丘オーパにて販売されました。



林規章先生が亀倉雄策賞を受賞！

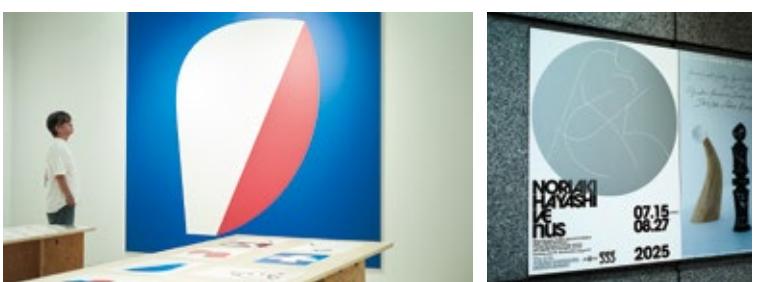
その創作の裏側を知る

展覧会＆トークショーが開催されました



Joshihi SPACE 1900

本学ヴィジュアルデザイン専攻教授・林規章先生による「女子美術大学 大学院／3年次編入／短大専攻科 学生募集」ポスターが、第27回亀倉 雄策賞を受賞したことを記念し、「ギンザ・グラフィック・ギャラリー(ggg)」と本学相模原キャンパス「Joshihi SPACE 1900」にて展覧会が開催されました。gggではトークイベントとギャラリーツアーも行われ、展示期間中に延べ約8000名が来場。作品集『VENUS』も完売となるなど、非常に好評を博しました。また、本学相模原キャンパスでの展示も、学生をはじめとても多くの方にご覧いたしました。gggではトーキングイベントとギャラリーツアーも行なわれ、展示しての開催となりました。



Text 株式会社TURBAN Photo 研波周平 吉濱篤志



林先生が女子美に来る前のこと

ここからは、林先生をはじめ本学客員教授の吉田ユニ先生、アートディレクターの服部一成さんを迎えて、約1時間半にわたって行われたトークイベントの模様をご紹介します。

林先生の亀倉雄策賞受賞作を含む展覧会「2025 JAGDA 亀倉雄策賞・新人賞展」が行われたgggでのトークイベント。100人近くの観覧者が詰めかけた会場で、まずは林先生が女子美の先生になる前の仕事について語られました。

林先生(以下、林)「女子美に来る商品広告が中心でした。会社をやめたのは、JAGDA新人賞を受賞した2003年。そこから自分のスタイルが生まれてきました。花王時代、インハウスならではの苦悩はあつたけれど、だからこそ生まれるものがあり、学ぶことがたくさんありました。その後、2004年に女子美

約20年にわたって林先生が手がけてきた、女子美の学生募集ボスター。その原型となったのが、林先生が初めて担当した大学院の第4回学生募集ポスターでした。林「女子美の頭文字の“J”をモチーフに、Jから生まれる形を模索しました。たまたま曲線と直線で構成された形だったから、なんでもできそうな気がしたんです」

服部さん(以下、服部)「抽象・幾何学的な構図はいきなり始めたんですか？」

林「平面構成は昔から好きでしたし、そもそも美術が好きなんです。特にヘンリー・ムーアやハンス・アルプが好きで、彼らの作品には言葉にならない情熱を感じています。デザイント、課題解決とか『お医者さん』とか言われることがあるけれど、だからこそ生まれるものがあり、学ぶことがたくさんありました。その後、2004年に女子美



亀倉雄策賞受賞作の裏側

の教員になつてすぐに、大学院の学生募集ボスターを担当することになりました」

前、長く花王のインハウスデザイナーをやつていました。マス向けの仕事について語られました。

林先生(以下、林)「女子美に来る商品広告が中心でした。会社をやめたのは、JAGDA新人賞を受賞した2003年。そこから自分のスタイルが生まれてきました。花王時代、インハウスならではの苦悩はあつたけれど、だからこそ生まれるものがあり、学ぶことがたくさんありました。その後、2004年に女子美

約20年にわたって林先生が手がけてきた、女子美の学生募集ボスター。その原型となったのが、林先生が初めて担当した大学院の第4回学生募集ポスターでした。林「女子美の頭文字の“J”をモチーフに、Jから生まれる形を模索しました。たまたま曲線と直線で構成された形だったから、なんでもできそうな気がしたんです」

服部さん(以下、服部)「抽象・幾何学的な構図はいきなり始めたんですか？」

林「平面構成は昔から好きでしたし、そもそも美術が好きなんです。特にヘンリー・ムーアやハンス・アルプが好きで、彼らの作品には言葉にならない情熱を感じています。デザイント、課題解決とか『お医者さん』とか言われることがあるけれど、だからこそ生まれるものがあり、学ぶことがたくさんありました。その後、2004年に女子美

ど、僕にとってのデザインは、色と形のコミュニケーション。グラフィックでしか伝えられないものってなんだろう。絵画の情熱を、グラフィックでできるははずだ。そんなことをずっと考え続けてきました」

服部「20年前のポスターにあつたビンクと青のJ。そこから特に近年、相当の進化をされていることが、いつも気になつていきました」

林「よく、『これ何?』って言われるんです。自分でも説明はできないけれど、いろんなものに見えたらいいなと思っています。伝わるか伝わらないかではなく、刻まれるか刻まれないか。絵画とデザイン、どう違うんだろうと考えた時に、やっぱりデザインでも残るものを作りたい」

吉田さんの日にはどう見えるんですか?「見、すごく遠いのかな?」

服部「林さんのような抽象表現は、吉田先生(以下、吉田)「自分にはないタイプのデザインだと思つてます。だからこそ新鮮だし、すごく好きです」

林先生にとっての「手書きスタディ」

吉田「今まで書きためてきたものにピントがあるんですか?」

林「そうです。僕の中にある、好きな形。それが見つかるまで描き続けます」

絵画は好きだが「手書きは自分らしくない」とも話す林先生の作品は、どれもコンピュータで作られています。けれど、創作の前の「手書き」のプロセスは、決して欠かせないものだそう。

林「コンピュータに向かう前に、必ず手書きで描くようにしています。描いたものが直接反映されるわけではないのですが、一度描いてみる。フリーハンドでも、自分の描いた線をなぞるでも、とにかく形を追いかけるんです。色より先に、形が決まっていくことを大事にしています」

両展覧会でも展示された、たくさんの手書きのスタディ。まさにこのスタディが、林先生の創作の始まりの記録です。

服部「デザイナーって、自分のスタイルをためていくことをあまりしないで、とにかく形を追いかけるんです。一番コストパフォーマンスがいい方法を人は選ぶけど、どれだけ遠回りして、どれだけいろんなことを味わつたかで生まれる、新しいものがいると、僕は思います。すべてのことはやり尽くされている気がするし、その中で自分らしさとは何かを探したい。本当にかすかな希望の中で続けています」



い。でも、そういうものを地道に積み重ねているのはすごいし、珍しいと思う」

林「僕、野球が好きなんですけど。イチローの言葉に「誰でもできる」と、誰もできないくらいやる」というのがあるんです。有名になりたいわけじゃなくて、いい仕事をしたい。そのきっかけになるためのアクションが、「誰でもできることを、誰もできないくらいやる」なんですね。」

「番コストパフォーマンスがいい方法を人は選ぶけど、どれだけ遠回りして、どれだけいろんなことを味わつたかで生まれる、新しいものがいると、僕は思います。すべてのことはやり尽くされている気がするし、その中で自分らしさとは何かを探したい。本当にかすかな希望の中で続けています」

吉田「今まで書きためてきたものにピントがあるんですか?」

林「そうです。僕の中にある、好きな形。それが見つかるまで描き続けます」

8月29日から31日までの3日間、「じよしりき【女子力】展」がデザインフェスタギャラリー原宿にて行われました。

じよしりき【女子力】展とは、女子美生が持つ「群れない・違いを認め合う・自由な・力強い・流行に流されない」をテーマに、杉並キャンパスと相模原キャンパスの両校地の学生が原宿のデザインフェスタギャラリーに集まり、

それぞれの思いを込めた作品を披露することができるイベントです。

作品展示の経験を通して他者・社会との繋がりや関係性を学ぶと共に、自身の「好き」なことをもつと「好き」に、このイベントに参加した全ての女子美生が、「好き」を確固たる「力(自信)」に変えられるような機会にしました。

学生による在廊のもと、およそ120の団体の女子美生が参加し、絵画作品と立体作品の展示やオークション販売、オリジナルのイラストやデザインで施したグッズ・アクセサリーの販売のほか、マンドリンクラブのパフォーマンス演奏など、学生それぞれの個性があふれた数々の作品が一堂に会し、多くの来場者を魅了しました。

2025

じよしりき
【女子力】展
2025



佐野ぬい先生 追悼展・回顧展レポート

1955年に本学芸術学部洋画科を卒業した画家、佐野ぬい先生の回顧展がこの夏、生まれ故郷の青森県の美術館で開催されました。

卒業後、長きにわたり後進の指導にあたり、本学学長にも就任をした佐野先生は、特徴的な青を基調とする抽象表現から「青の画家」と呼ばれ、数多くの絵画作品を創り出してきました。

2023年、90歳でこの世を旅立たれてから2年後の今年、2月には佐野先生の生まれ故郷である弘前市の弘前市立博物館にて「佐野ぬい追悼展 monochrome、そしてblue」が開催されました。そして7月には青森県立美術館で大規模な回顧展「佐野ぬいまだ見ぬ「青」を求めて」が開催され、本学卒業生で佐野先生から油絵の指導を受けた藏屋美香さん（横浜美術館館長）が講師となつた特別講演会「青

い鳥をさがしに…佐野ぬいの絵画をじっくり読み解く」も行われました。

9月下旬には、本学洋画専攻研究室を中心取材撮影に全面協力のもと、NHK

日曜美術館にて特集「明日への想い 青に込めて洋画家・佐野ぬい」が放送されました。また、女子美ガレリアニケ（杉並キャンパス）では、佐野先生が表現するコラージュ作品を中心に、生涯にわたり描き続けた「青」の作品群を紹介した「女子美スピリッツ2025 佐野ぬい 青の諧調collage」が開催され、佐野壮さん（ご子息）と本学洋画専攻卒業の藤原晶子さん（作家アシスタント）のトークイベントも行なわれました。

佐野先生が追求し続けた独自の色調のコンビネーション、その「青」の諧調は、これからも世代を超えて多くの人々の心に響き続けるでしょう。



ラデック・トマン

建築家、ブルノ工科大学建築学科 国際担当副学部長
都市の未利用地と自然生態系との関係について読み解きながら、人間の都市開発活動を野生の視点で観察することで、その持続可能な方途を探る建築・都市研究者。

夏休み 3 DAYS ワークショップ 「都市に暮らす野生動物のための家をデザインする」開催

スペース表現領域と環境デザイン専攻の夏休み共同企画として、ブルノ工科大学建築学科 ラデック・トマン先生をお招きし、3日間の特別ワークショップを開催しました。このワークショップでは、杉並キャンパス周辺の地域を散策しながら、都市に暮らす野生動物のための棲家をデザインします。周辺地域を散策し蜂や鳥が暮らす都市の空隙を見つけ、そこに野生動物たちと人間の暮らし双方の関係を豊かにするような棲家の提案を試みました。都市に暮らす人間の生活をデザインするのに、人間以外の視点に立ってみると新しい都市空間デザインの可能性を探索する3日間となりました。ワークショップ最終日には参加者それぞれの提案モックアップを会場に並べ、作者からのプレゼンテーションとトマン先生からの講評をいただきました。

DAY 1

2025年 8月19日(火) 10:30 ~ 16:00



AM▷オープンレクチャー「都市とその未利用地について」



PM▷ワークショップ「都市を漂流し、都市の野生をマッピングする」

DAY 2

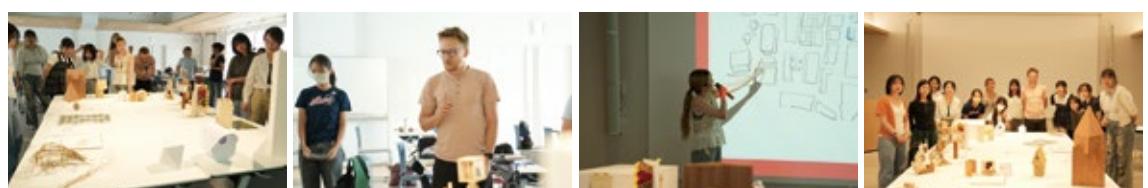
2025年 8月20日(水) 10:30 ~ 15:00



AM・PM▷ワークショップ「都市で単独生活する蜂や鳥のための家をデザインする」

DAY 3

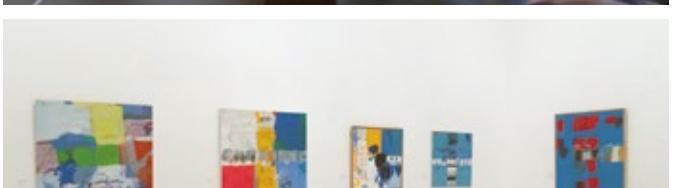
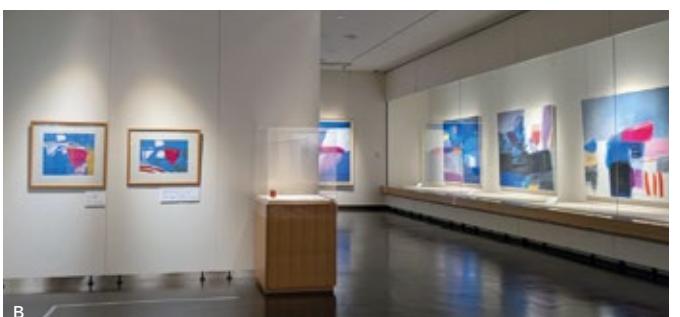
2025年 8月21日(木) 10:30 ~ 15:00



AM▷ワークショップ「都市で単独生活する蜂や鳥のための家をデザインする」 PM▷成果発表と講評



AB▷ 佐野ぬい追悼展 monochrome、そしてblue（弘前市立博物館）
CD▷ 佐野ぬいまだ見ぬ「青」を求めて（青森県立美術館）
ED▷ 女子美スピリッツ2025 佐野ぬい 青の諧調 collage（女子美ガレリアニケ）



JOSHIBI アーティスト・イン・レジデンス (JOSHIBI AIR) 2025

JOSHIBI AIRは、国内外のアーティストやクリエイターを本学に迎え入れ、新たな表現や研究につながる活動を支援するプログラムです。大学の授業への参画やアーティストトーク、ワークショップなどを行い、活動の様子や成果を学生や教職員、地域の方々へ広く公開します。2025年度は9月より3ヶ月間、ニディヤ・クスマヤさん（インドネシア・バンドン工科大学修士課程修了）と吉田未空



Photo: Kenta Kawagoe

さん（本学大学院美術研究科博士前期課程（洋画）修了）を招聘し、相模原キャンパスのJOSHIBI AIRスタジオを拠点に活動を行いました。

JOSHIBI AIR インスタグラム



客員教授 奥村靄正氏・澁谷克彦氏 特別講義開催

10月25日に相模原キャンパスにて芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻客員教授の奥村靄正先生と澁谷克彦先生による特別講義が開催されました。本講義に参加する学生はテーマに沿った課題を制作し、講評いただきました。今年のテーマは「超日常 (Very Ordinary Day=VOD)」。自分にとっての「超日常」とは何かを自由に解釈し、表現したグラフィック、映像、立体作品など様々な作品が並びました。講評は、テーマへの解釈や表現方法、今後の制作にも繋がる助言を一人一人にいただきました。最終的に、3年仁部ひな乃さんに奥村靄正賞、3年タンキティさんに澁谷克彦賞が贈られ、普段の授業とは違う緊張感のある貴重な講義となりました。



奥村靄正賞 3年 仁部ひな乃さん

澁谷克彦賞 3年 タンキティさん

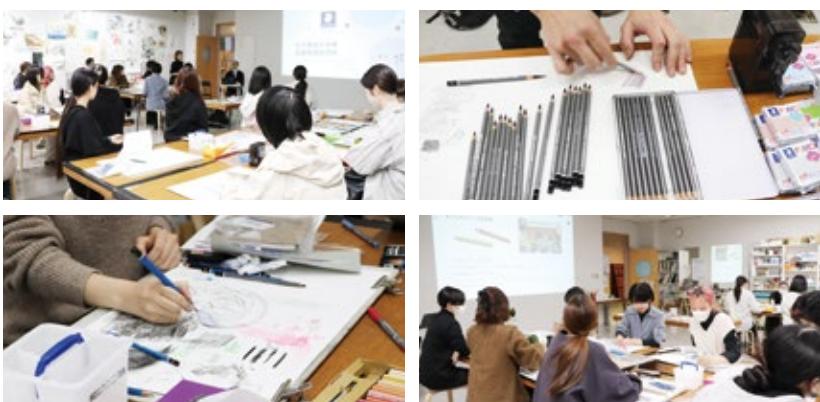
ハイブリッドドローイング演習 ペベオアクリル絵の具で広がる新しい表現

9月19日、フランスの画材ブランド「ペベオ」のオリジンアクリル絵具と各種メディアムを用いた、最先端の表現技法を体験できる実践講座が開講されました。フランスの画材ブランド「ペベオ」の画材を自由に使用し、20×20cmの3D張りキャンバスに、参加者それぞれが1枚の作品を制作しました。透明感・発色・丈夫さを兼ね備えたオリジンアクリル絵具に加え、アクリルメディアムや油性／水性マーカーを組み合わせることで、表現の幅はさらに広がりました。講師に画家・杉田陽平さんをお招きし、新たな素材の魅力を体感しながら、独自の表現を探求する充実した時間となりました。



ハイブリッドドローイング演習 ステッドラー鉛筆で描く、線の奥行き

11月7日、美大生なら一度は手にしたことがあるドイツの老舗筆記用具メーカー「ステッドラー (STAEDTLER)」をお招きし、実践講座が開講されました。まず、ステッドラーの歴史や環境への取り組み、鉛筆ができるまでの工程を学びました。その後、特徴の異なる全8種類の鉛筆を各自由に試しながら、その使用感を確かめました。1本で色鉛筆、クレヨン、水彩色鉛筆と3種類の使い方ができる「ノリスジュニア色鉛筆」や軸も芯も太く、子どもでも握りやすい「マルス ルモグラフ ジャンボ 高級鉛筆」など、普段なかなか使う機会のない鉛筆も体験できました。この演習を通して、鉛筆ごとの特性を実際に手で確かめることで、道具の選択によって表現の幅が大きく変わることを実感し、今後の課題制作にも活かしていく講義となりました。



ドローイングセンターの取り組み

女子美術大学では、「描く行為」に特化した専門的な技術と知識を多角的に研究し、実践的に社会に還元するための施設として相模原キャンパスにドローイングセンターを設置しています。本センターでは、授業の空き時間や放課後の時間を使って、自由にデッサン力を鍛えることができるほか、モデルのクロッキー会や企業・講師を招いてのハイブリットドローイング演習も企画しています。

NEWS — & — TOPICS

学生デザインの児童書売場「みらいやの森」

本学は、イオングループの株式会社未来屋書店および板橋区との三者による産官学連携プロジェクトとして、「未来屋書店 板橋店」のリニューアルにおいて、児童書売場「みらいやの森」の内装デザインを共同開発しました。デザイン監修を三浦太郎先生（本学特別招聘教授／絵本作家）、デザインディレクションを杉山優子先生（本学非常勤講師／デザイ

ナー）、実際のデザイン創作をヒーリング表現領域3年生の石井亜衣さんと武井彩波さんが手がけました。売場の壁面には、板橋区の鳥であるハクセキレイが板橋区の街をめぐる様子が描かれており、地域の方々がアートに触れることのできる空間を生み出しました。11月1日には、リニューアルを記念してオープニングセレモニーも行われました。



未来屋書店公式アプリ「文豪キャラクターデザインコンペ」

本学と未来屋書店のコラボ企画として、未来屋書店の公式アプリで使用される「文豪キャラクター」のデザインを募集するコンペが開催され、美術教育専攻1年生の横溝千香さんとヴィジュアルデザイン専攻4年の高橋美月さんの2名のデザインが最優秀賞に

選出されました。11月15日には本学杉並キャンパスにて授賞式が行われました。最優秀賞に選出されたデザインは未来屋書店公式アプリで展開されるキャラクターとして採用されております。ぜひご覧ください。



04

未来屋書店 × 女子美術大学 産官学連携プロジェクトレポート



01

本学大学院客員教授のイケムラレイコ先生が2025年度文化功労者に選定

本学大学院客員教授であり、国内外で活躍される美術家のイケムラレイコ先生が、2025年度の文化功労者に選定されました。絵画や彫刻、ドローイング、写真、詩などのさまざまな媒体を用いて独自の表現を確立し、長年にわたり芸術文化の発展に寄与してこられた功績が高く評価されました。

三重県津市生まれ。1970年代にスペインに渡り、スイスを経て1980年代前半よりドイツを拠点に活動。1991-2015年ベルリン芸術大学教授。2014年より女子美術大学大学院客員教授。2020年芸術選奨文部科学大臣賞受賞。日本のはか、世界各地で個展を多数開催している。



03

本学学生が小児用新型ドクターカーの車両デザインを担当しました

本学ヒーリング表現領域4年の沖津菜奈子さん、熊倉ひろさんが、東京都立小児総合医療センターの小児用新型ドクターカーの車両デザインを担当いたしました。「子どもたちの不安を和らげるデザイン」をテーマに制作に取り組み、医療現場に温かさと安心感を届ける車両デザインとなりました。7月31日には小児総合医療センターにて、お披露目会が開催され、学生によるデザインの説明が行われました。



02

ラトビア共和国文化省事務次官ならびに駐日ラトビア共和国大使館ご一行が本学を訪問されました

8月21日、ラトビア共和国文化省ダツェ・ヴィルソネ事務次官および駐日ラトビア共和国大使館ズィグマールス・ズィルガルヴィス特命全権大使の一行が本学を訪問され、小倉学長、後藤副学長、日沼教授（クリエイティブ・プロデュース表現領域）、西田准教授（スペース表現領域）、辻研究講師（JOSHIBIアーティストインレジデンス）が懇談に参加しました。小倉学長より歓迎の挨拶があり、本学の教育・研究活動、国際連携の取り組みについて紹介した後、今後の交流の可能性について活発な意見交換が行われました。今回のご訪問は、本学とラトビア芸術大学との間で、将来的な学術交流の発展に向けた理解と信頼を深める貴重な機会となりました。



07 | 女子美 × ヒットビジョン コラボレーション展を開催

8月4日～8月31日の4週間にわたり、屋外広告を専門に取り扱う株式会社ヒットと本学がコラボし、『女子美×ヒットビジョン コラボレーション展』を開催しました。本プロジェクトは、渋谷駅周辺に株式会社ヒットが保有する屋外広告デジタルボード「シブハチヒッ

トビジョン」および「シンクロ7シブヤヒットビジョン」にて、本学の芸術学部アート・デザイン表現学科と大学院の学生が、授業カリキュラムの一環として制作した映像作品を放映するものです。13名の学生による作品が8面同時放映され、渋谷駅周辺を彩りました。

08 | 「日動画廊第12回未来展」にて本学学生がグランプリ受賞

本学美術学科洋画専攻3年の藤代彩乃さんが、日動画廊本店で開催された「第12回未来展 -日動画廊 美術大学学生支援プログラム-」にてグランプリを受賞し、本学では初の快挙となりました。本展覧会は、学生作家の学びの場、挑戦の機会を設けるという主旨のもと、2014年に発足された、推薦制・コンクール形式の企画展示です。

なお本学からは、藤代さんに加えて、李佳遠さん（大学院美術研究科美術専攻博士前期課程版画研究領域）、穴吹さくらさん（芸術学部美術学科洋画専攻4年）、大貫蘭さん（短期大学部造形学科2年）の計4名が出品しました。



05 | 本学学生が 茅崎大村美術館にてワークショップを実施

8月10日、本学と相互協力協定を結ぶ茅崎大村美術館において、本学美術教育専攻の学生による「オリジナル風鈴づくりワークショップ」が開催されました。ワークショップには茅崎市内外から17名の小学生が参加し、紙コップやクリアカップを用いた風鈴制作に取り組みました。

参加児童はそれぞれの発想を生かして制作を進め、多彩な作品が生まれました。また学生にとっても、児童への指導を通じて学びを深める貴重な機会となりました。

06 | JAGDA国際学生ポスター アワード2025にて 本学学生が銅賞はじめ 多数の賞を受賞

1年に1回、年齢や学年を超えて、すべての学生作品の中から最優秀作品を選出するポスターコンペティション「JAGDA国際学生ポスター アワード2025」にて、過去最多となる世界29の国と地域から3466点の応募があり、選出された267点の入賞・入選・準入選作品のうち、本学学生が銅賞をはじめ、多数の賞を受賞しました。受賞作品は、11月26日～12月8日の期間、国立新美術館にて展示されました。

その他受賞者などは
こちらをご覧ください





11 | 八戸市指定文化財「山車人形 太公望」修復完了お披露目会

本学染織文化資源研究所が担当した、八戸市指定文化財「山車人形 太公望」の衣裳修復が完了しました。これを記念して、7月29日には所蔵者であるおがみ神社の神楽殿にて修復完了お披露目会が開催されました。お披露目会では、一般の方や地元の八戸工業大学第二高等

学校の生徒たちに対し、修復を担当した大崎綾子先生（工芸専攻教授／染織文化資源研究所）による解説が行われました。なお、今回修復された「太公望」は6年ぶりに、「八戸三社大祭の山車行事」のおがみ神社行列において曳き出されました。



09 | 本学卒業生 なかむらずいさん × ザ・リッツ・カールトン東京 「ザ・リッツ・カールトン アート & クラフト アフタヌーンティー」

10月1日～11月26日の期間中、ザ・リッツ・カールトン東京にて、本学短期大学部卒業生のなかむらずいさんとのコラボレーションによる「ザ・リッツ・カールトン アート & クラフト アフタヌーンティー」が提供されました。今回のコラボレーションは、なかむらさん独自の染色技法「筒描染（つつがきぞめ）」が、ホテルのベストリーシェフ

がホイップを絞り出す様子と類似していることから着想されました。提供開始に先立ち、9月30日にはホテルにてプレイベントが開催され、染色のデモンストレーションを実施し、ベストリーシェフが同時にエディブルペーパーに着彩するアートとスイーツが融合する様子を披露しました。



13 | 女子美術大学 × 日本アニメーション株式会社 コラボ企画作品を ところざわサクラタウンで発表

8月9日～17日、ところざわサクラタウンで開催された日本アニメーション50周年記念イベント「ファミリーアニメアカデミー」にて、本学学生作品を展示・上映しました。本企画は、本学アート・デザイン表現学科メディア表現領域とヒーリング表現領域の授業カリキュラムの一環として実施され、16名の学生が参加。「フランダースの犬」「あらいぐまラスカル」「みつばちマーヤの冒険」など、日本アニメーション株式会社の名作ストーリーやキャラクターを題材に学生たちの感性で再解釈し、アニメーション・イラストレーション・インラクティブ作品など全10作品を制作しました。また、本学学生が描いたオリジナルイラスト水転写シートを使ったアートペイントのワークショップも開催され、多くの来場者でにぎわいました。学生たちの自由な発想と表現力によって、日本アニメーションの名作が新たなかたちでよみがえり、多くの方にその魅力をお届けすることができた、意義深い時間となりました。



12 | プロジェクト&コラボレーション演習 成果作品展示

芸術学部アート・デザイン表現学科の「プロジェクト&コラボレーション演習」授業の一環で行われた、水産研究・教育機構とのプロジェクト成果作品が、8月1日～11月30日の期間中、栃木県日光市にある「さかなど森の観察園 おさかな情報館」にて展示されました。

10 | 美粒子 女子美術大学創立125周年記念日本画作品展を開催

10月28日～11月9日、千葉県の佐倉市立美術館にて『美粒子～女子美術大学創立125周年記念日本画作品展』が開催されました。本学の前身である「私立女子美術学校」時代より関係のある佐倉市とは、2012年4月に地域社会の発展と人材育成に寄与することを目的とした連動協働に関する協定を結んで以来、相互の協力のもと、歴史や芸術

に関する講義やワークショップなど、様々な事業が実施されました。第4回目となる今回は、本学創立125周年を記念する展覧会として、大学院2年生・卒業生・研究室教員40名による作品が並びました。また、日本画素材見本や当校の歴史的資料、大学案内なども展示・配布し、女子美の伝統と現在を伝える展覧会となりました。

女子美術大学創立125周年記念展
女子美とフランス—もうひとつの日仏交流史
2025.5.29(木) - 8.5(火)

女子美術大学創立125周年を記念して、フランスに魅せられた卒業生の選りすぐりの作品を紹介しました。

令和7年度第45回 造形「さがみ風っ子展」
2025.10.24(金) - 10.26(日) ※会期中無休

南区会場として、相模原市内小中学生の造形作品を展示しました。

女子美染織コレクション展 Part13
インドネシアの染織品 群島の布をめぐる
[前期] 2025.11.6(木) - 11.15(土)

[後期] 2025.12.10(水) - 12.23(火)

女子美染織コレクションの中から、インドネシアのバティック、イカットなどの資料を展示了しました。

女子美ガレリアニケ

女子美術大学短期大学部1年前期「基礎造形2025」展
2025.7.9(水) - 7.25(金)

短期大学部1年生が自由選択授業で制作した、13講座の作品を展示了しました。

2025年度女子美術大学退職教員記念展
2025.11.26(水) - 12.20(土) ※12月6(土)、13日(土)休廊

2025年に本学を定年退職される実技系教員による展覧会を開催しました。

歴史資料展示室

横井玉子生誕170年記念 横井玉子と5人の人物
2025.4.3(木) - 7.19(土)

本学創立者・横井玉子の生涯と功績を紹介とともに深い関わりをもった5人の人物を展示了しました。

2025年度女子美術大学退職教員記念展
2026.1.7(水) - 1.29(木)

2025年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

2025年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2026.3.7(土) - 3.14(土) ※3月8日(日)特別開廊 ※3月12日(木)、13日(金)休廊

2025年度に大学院博士前期課程を修了する学生作品を展示了します。

女子美ガレリアニケ

アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域
卒業制作・修了研究展2025
2026.1.15(木) - 1.27(火)

アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域4年生、
大学院博士前期課程2年生による卒業制作・修了研究展を開催します。

歴史資料展示室

2025年度 新収蔵資料展
2025.9.10(水) - 2026.3.14(土) ※休室日 火・日・祝日、年末年始(12月27日(土)～1月4日(日))

2024年度に収蔵した新資料を展示公開します。

女子美術大学・女子美術大学短期大学部 助手展 2025
2025.9.17(水) - 10.3(金)

本学各研究室共同の取組みとして、助手59名による、芸術・デザイン全般にわたる作品・研究成果を展示了しました。

令和7年度神奈川県高等学校総合文化祭
第72回高等学校美術展
2025.11.27(木) - 11.30(日) ※会期中無休

神奈川県内高校生の絵画、彫刻、デザイン、工芸、映像メディア、授業等の作品、安全振興会ポスター原画コンクール受賞作品等の展示・紹介をJAM展示室・ロビーのほか、相模原キャンパス学内の各所にも展示了しました。

展覧会報告 PICK UP

女子美染織コレクション展
Part13
インドネシアの染織品
群島の布をめぐる

[前期] 2025.11.6(木) - 11.15(土)

[後期] 2025.12.10(水) - 12.23(火)

相模原キャンパス(女子美アートミュージアム)



「女子美染織コレクション展 Part13 インドネシアの染織品 群島の布をめぐる」では、本学が創立100周年記念美術資料収集拡充事業の一環として収集したインドネシアの織物類のコレクションと、竹内葉氏旧蔵のバティックコレクションの中から展示了を行いました。

17,000を超える島々からなるインドネシアは世界最大の群島国家であり、現在でも数百を数える民族が暮らす多民族国家としても知られています。

当地では多様な民族が、さらにインドや中国、イスラム文化、オランダからの植民地化、第二次世界大戦中の日本軍による占領など、諸外国からの影響を受けながら、多層的な文化を築いてきました。

ゆえにインドネシアの染織品は地域や民族ごとに異なる技法や意匠を伝えています。

本展では、ジャワ島を中心に展開するバティック(ろうけつ染め)の驚くほど緻密な模様や、スンバ島、ティモール島、スマトラ島、バリ島をはじめとする島々に受け継がれた、紺織・縫取織などの技法とデザイン、南洋の色彩豊かな染織品の45点を紹介しました。



靈船模様儀礼布 [部分] 19世紀-20世紀 スマトラ島クルイ



女子美術大学広報誌

発 行 校校法人女子美術大学

〒166-8538

東京都杉並区和田1-49-8

企画・編集 総務企画部広報グループ

監修 担当 佐藤真澄・松山智一

デザイン協力 株式会社 Kitchen Sink.

印 刷 株式会社ヒーローズ

発 行 日 2025年12月23日

© 2025 校校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報
グループ

TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL <https://www.joshibi.ac.jp/>